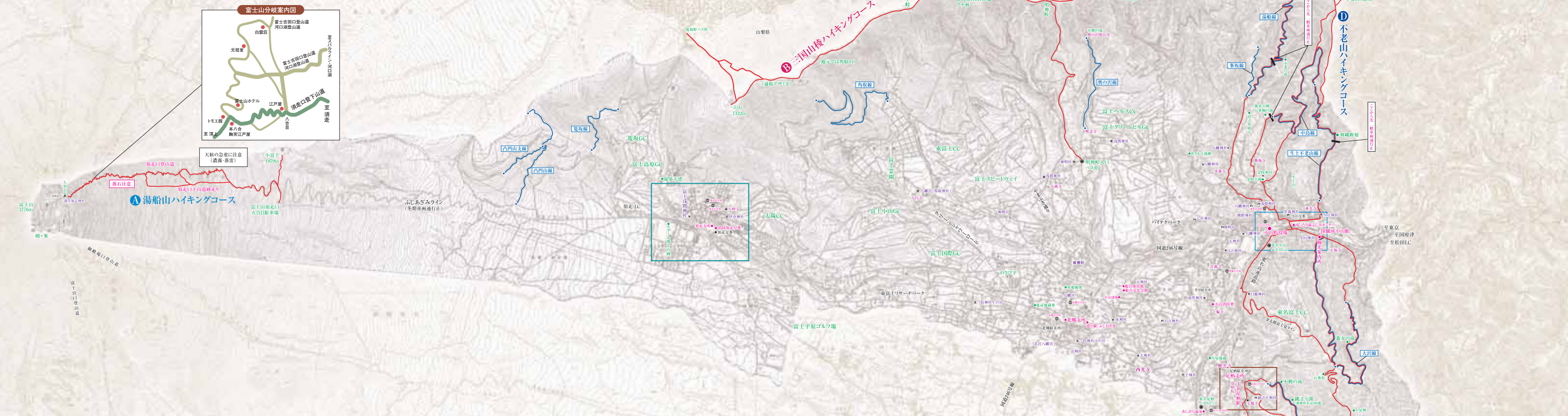


おやま町散策マップ



凡

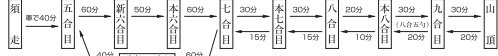


富士山

須走山登山道は、東麓の麓から、頂上付近を隔てるとして、峠の山頂にある久須志居まで登ることである。途中八合目で河口川・吉田山登山道と合流して山頂に至る。

須走まで約6kmのバス乗車は、須走駅行バスと道路情報センターで確認しなければならない。夏の登山期間には須走駅近口までバリエがあり、冬以外にはほぼ利用できるとして通常登山にはここから始まる。その登山道に比較して、森田現界が2,700メートルと高い山頂植物にも見られ樹間も緩やかに歩きやすい。規則正しく、樹林で覆われ小水溜(石室)などに、短時間の休憩と休むとやら登れば、八合までとはいわず苦勞なしに登れるとは別である。

落石事故など防止するため、登山道とは別に下山道が設けられていて、石ころ混じりの砂礫の道が比較的短期間で山頂から下ることができる。下山の際、注意しなければならないのは、八合で自分の目的地が須走か富士吉田かであることと確認することである。



小富士

標高1979メートルの小さな富士山、富士山頂の御焼山。頂走までのバスの車利用は運行状況と道事情形を事前に確認したい。登山口登山道五合目まではバス車を利用する。

古く神奈川の街から入る富士へのお参道は、1時間20分往復程度のコースである。コメツガ、タケバナなどの樹林の中にクルムエリ、タキシマシラ、ツバメオモなど希少な植物も多く、絶好の自然観察コース。

富士山頂上り登山の雄大な風景を楽しむこともできる砂礫の山頂周回には、ムラサキモンズルズメ・イゲツウナなどの先駆植物の逞強な生命力を誇示している。

この周辺は、毎年秋になるとキノコ採りの人々が道に迷って遭難事故があるように道を歩すと危険である。かつては馬越しかの道もあったが、豪雨後の出水などで地形が変化するたびに被害を受け壊道になった。迷わず歩く利用に危険である。

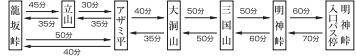


三国山稜

丹波川口の西端(崎)から神明峠に至るなどには古代の経路があり、三国峠と呼ぶ。富士が開設した西北(崎)つ山腰上の三国山頂にはアサの原が残り、アサの芽吹きや紅富士の季節の風流は素直な所。

西から西の山は龍蛇峠。東の上野(神明峠からバス停)までは御殿場駅からバスが利用できる。上野から上野川沿いに西の中野平野までは車が使える。ただし、バスや車を利用する場合冬は急な登り下りがあり、東の上野(神明峠)にはアサの原とよく似た山頂がある。

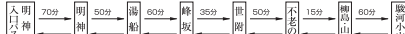
西から東へ向かうと、山頂上の地名が西の呼称「西の山頂」→東の山頂→東の山頂と異なるものがあるため、地元でコースを認める時の注意は注意しなければならない。冬期は他のコースに比べて積雪量が多く、降雪後の登山は注意を要する。



湯 船 山

三十四回には、不毛なる山々を縫線したピーチ線山脈へのコースは、比較的登山者が少ない静かな歩きを楽しみとすることである。神明峠から湯船山に寄り、西附から柳下に至るコースが一般的に利用されている。また、その西コースや不老山を加えたコースの町までであるが、神明峠、峰峠、西附峠を越えるコースは、かつて一部(山梨県・北部都府)の商賈や炭焼釣師などが行き交った脈と関係し、相模と結ぶ重要な峠道だったが、現在峰峠は利用されていない。もう一つの道はかつての峠越えの舊道である。

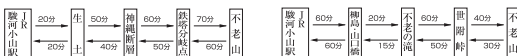
湯船山は二等三角点の石が埋められている。このコースも車を利用する場合は、事前に道路事情や運行状況などをよく確認しておく必要がある。



不老山

不老といふ名に惹かれてか、四季を通じて訪れる人が多い。山頂部は三つのピークからなり、最高峰の928メートルのピークは神倉川奥である。世羅峠から登りつめた静閑奥峰の西側のピークからは、富士山を見ることもできる。

小川の生土、中島、柳崎と神倉川の上流と市場や浅瀬などから登るコースもあり、自分の体力や好みに合った組立てを考えるとよい。楊梅谷の林道には不老の滝があり、もう一方の山道はかつて灰炭きの荷駄の道である。生土不老川コースには、フィリピン海プレートとユーラシアプレートが衝突してできた神前断層の露出が見られる。

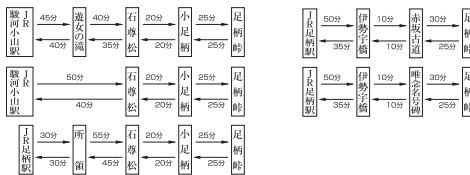


足柄峠

標高750メートルの足尾峠からは、縄文時代の土器片が採取されると、古くから東上川と西上川を要衝として利用されてきた。

峠からの秀麗な道標と山は、古来歌人の歌にうけて詩に詠まれている。特に峠には小川原山脈の尾の尾根城を道標や聖王と、奇神や神楽など石造物も見える。新羅二郎が道標峠に依る秘伝を伝授したという伝説の「首割川」にちなみ、毎年9月には普賢まつりが行われる。

町内川上との大沢瀧、流瀧線や所領、川下などからいくつかのコースがある。そのうち川下では地蔵川沿いの巻道やコースのみは最も利用されている。流瀧線は緩やかな山肌駅への近道だが往きは遠く登山者の道を必要とする。所領から東上京土ゴルゲルを緩く経ては富士上川の展望を眺められコースである。川下から、唯名の号峠や坂坂古道とを經由する近世の歩路網と幾つと濁などを経由する地蔵川沿いの巻道やコースのルートがある。



金 時 山

箱根外輪山の最高峰1213メートルの金時山は、江戸時代までは猪苗山と呼ばれた。近世前後に、足柄山の金太郎として有名な金田時右衛門の附近に定住して以後、金時山という山名が使われるようになった。

山からの眺望は、眼下の芦ノ湖に仙石原と箱根の風景や、富士山をはじめ丹沢、南アルプス、伊豆の山々と360度のパノラマを楽しむことができる。

金時山は、箱根の山々の中でも、最も山頂の眺望がよい。箱根の山々が一般的である新緑からの道に迷い難く、また、金時山の山頂の起源と連関する四つのある「金時神社」跡を頼りて山頂に至る静かな静かなコースである。南コースと山頂直下の島崎からは急斜面で傾斜しており、登下路の際の落石や落石との危険には、くれぐれも注意した。

